海の卵　シナリオ

monobe0329

01　海の卵

『海の卵』

涼子 あたしがあたしに嘘をつく。こんなことはたいして難しいことじゃない。この胸に右手を突き刺し、心臓をほんのひとかけ、摘み出せばいい。
そしてその蠢く心臓のかけらにこう呟くんだ。
・・・ここはあたしの、部屋だ・・・。あたしは、朝、目を覚まして会社に行こうと、している・・・
あぶくの音。
間
涼子 何気なく川を眺めたままのあたしがいる。どうしたんだろう、あたし・・・
間

喫茶店のような感じで、瀟洒な音楽。
涼子 あたし・・・。なんだか、最近・・・ううん、別にどうってことないんだけど
男 なんだかな。どうしたんだよ、涼子。そんな難しい顔してさ
涼子　ね、あんたはあたしの幼なじみで、そしてあたし達、今は付き合っているんだよね
男 どうかしたの。ひょっとして健忘症ってやつ
涼子 違うよ、ちょっと確認したかっただけ。なんだか、あたし、変なんだ・・・
間
涼子　何がどうしたんだと心配するふうもなく、この男、珈琲を啜る。多分、何も考えていないのだろう。この付き合いも、もうおしまいだな

滴が一つ落ちる音。
涼子　まただ・・・、どうしても頭の中からこの音が消えない・・・

間
喫茶店の音楽が消えて。
涼子　あたしは生きている。これは間違いない・・・、と思う、多分・・・。なんて言うんだろう、なんだか変なんだ。 あたし、本当に生きているのかなって思うんだ。例えば何かを掴む。何でもいい、さっき自動販売機で買った暖かい缶珈琲でもいい。そっと片手で握ってみる。そしてゆっくりと両手で握ってみる。握っているんだけど、握っているんだけど、なんだか、頼りないんだ。見た目よりも軽い、ううん、そんなんじゃない。なんだか柔らかい、違う、そうじゃない。なんだか、持っているはずの缶珈琲が、ほら、ふっと消えてしまいそうで、たまらなく不安なんだ。頼りないんだ。触れるもの全てが本当にあるって気がしないんだ、ほら、何気なくふっと掴んでみたらすっと指先が通り抜けてしまうんじゃないか、そう思えて仕方がないんだ。

間
仕事が終わって、ロッカー室で女性が着替えている。ロッカーの開く音、着替える音。
女１　ね、最近、彼女、おかしいと思わない
女２　彼女って
女１　ほら、涼子よ。経理課の
女２　そうかなぁ。別にいつもどおりじゃない、目立たない普通の
女１、含み笑い。
女２　なに笑っているのよ
女１　実はね、あたし、見たんだ
女２　ん、何を見たの
女１　実は・・・、ん・・・、やっぱりやめておこう
女２　え、なになに。言いなさいよ。あ、ひょっとして涼子の不倫とか
女１ ううん、そんなんじゃない、だいたい、彼女がそんなのするわけないじゃない。私、ん・・・、まっいいか。昨日、映画を観に行った帰り、喫茶店で涼子を見かけたんだけど
女２　うん
女１　ほんの一瞬だったけど、はっきりと見えたんだ。涼子が、びしょぬれで座っているのを。雨も降っていないのにさ。髪から、滴がぽたぽた、ぽたぽたって。まるで水死体のように
女２　それって幽霊噺じゃない。そんなひどい話、涼子が聞いたら気を悪くするよ。あんたはそういう話が本当に好きなんだから
女２　あれ・・・
女１　え・・・
女２　水・・・、ううん、海の匂いだ・・・。潮風の匂いがする・・・。何処からだろう・・・

滴が一つ落ちる音
涼子、呟くように。
涼子　別にどうってこと・・・、ない。絶対にない。
間
涼子　若い女が河原の土手に一人座っている。あまりいい格好じゃないな。隣りにあんな男でもいてくれたら、なんだかいい雰囲気なんだけど。『どう、寒くないかい。ううん貴方がいてくれるもの』ってね。でも、一人きりじゃどうしようもない。ケープ羽織って小さくうずくまるだけだ

間
電話で。涼子、深刻な感じで。
涼子　母さん、あたし・・・
母親　どうしたの、涼子。何かあったの
涼子　ううん、別に何もない。ちょっと母さんの声、聴きたくなったんだ

母親　どうしたのよ、何があったの
涼子　ちょっと・・・、懐かしかったから、それだけ。あたし、随分、実家に帰ってないものね。ね、父さんや香織、元気にして いるかな
母親　みんな元気にしているわよ。父さんは相変わらず元気なだけが取り柄の仕事人間だし、香織は、来年、大学受験で頑張って いるし。ね、あなたこそ、一人暮らしで 大丈夫。ちゃんと暖かくしてる。送った冬布団、使ってる
涼子　・・・うん。暖かくしてる・・・。ね、母さん。あたし、あたし・・・
母親 どうしたの、いいから、話してみなさい
涼子　あたし、帰ってもいいかな。また、一緒に暮してもいいかな。一人暮らしがしたいってあたし、家を出たけど、父さん、怒 るの振り切って家を出たけど、ごめんなさい。寂しくて・・・、辛くて・・・、 もう、一人じゃいられない
母親　・・・涼子・・・
涼子　ねぇ、母さん、お願い。お父さんにもあたし、あたし、謝るから
母親　・・・ごめんね、涼子。いま、香織の大学受験で家族も大変なのよ、あの子も浪人で来年が三度目の正直だし。だから、で きるだけあの子の環境を変えたくないの。だから、涼子・・・。香織の受験が終わるまで、あと、もう何ヶ月かじゃない、それまで、ね、お願い、涼子。待っててくれない。・・・あ、あら、お客様かな、じゃ、涼子、元気でね。暖かくしているのよ
電話の切れる音。ツーツーと音だけが残る。
涼子 母さん、お願い・・・
滴が一つ落ちる音。
涼子 母さん。あたしの頭の中が水で一杯になってしまうよう

風の音。缶珈琲の栓を抜く音。
涼子　少しずつあたしから人が遠のいていく。恋人、家族、友人、戸惑いながらも、あたし、何処かでそれは仕方のないことだと 知っている。泣いても喚いても仕方がないことだと受け入れている。もう限界だよとあたしの何処かが呟いているのが聞こえるんだ。
あたし、諦めているのか。そうだ、何に諦めているのかもわからないくせに、あたし、諦めている。
間
涼子　暖かい・・・
涼子　午後の日差し、夕方にはまだ少し早い。風の涼しさと裏腹に日差しだけが夏を思い出したように少し暖かくなった。ん、向 こうの土手、子供たちが遊んでいる。鬼ごっこかな・・・。追いかける女の子をうまく躱しながら、みんな逃げていく。要領の悪い女の子だ、後で男の子が手を振っているのに、それに気づかない
涼子　そうだ、振り返って。ほら・・・、遅いから逃げられた。なんだか、日差しの中で子供たちの遊ぶ姿、対岸が遠くて声が聞こえない。その所為か、まるで、あたしとは違う世界の出来事のようだ

あたかも、涼子の横にずっといたかのように自然に。
浮浪者 これも一つの風景だ
涼子 浮浪者・・・、橋の下に団ボールで小屋を作って生活している・・・
浮浪者 もうすぐ冬だ。冬の寒さはなかなかにこたえる
涼子　そんなに寒いの
浮浪者 あぁ、風は凌げる。団ボールの殻でな
涼子 団ボールの殻・・・
浮浪者　ああ。だが、水の冷たさだけは違う。ほんの少しの隙間からでも、そいつはひたひたと忍び込んでくる
涼子　そう・・・
浮浪者　お前は知っているか。雨が降り出す前のほんのひととき、遠く海の匂いが辺りに漂うことがある。雨雲が蓄えた海の匂いが辺りに漂いだすのだ
浮浪者　全ての生命は海から生まれた、多分その所為だろう。雨降る前の海の匂いが無性に懐かしい。消え去っていたはずの記憶がふっと脳裏をかすめるのだ
少しずつ、浮浪者の声が小さく なっていく。
浮浪者　人は遠い海の匂いを恐れる。思い出すのが恐くて仕方がないのだ。偽りが剥がれることが恐ろしいのだ
涼子　偽り・・・
涼子　ゆっくりと、滲むように男の姿が薄れていく、その身に橋の欄干を映しだし、空の色と重なり消えていく
涼子 あたしもそう思うよ。人はそんなに強くない
涼子　視線を対岸に戻せば小さな子供たちの遊ぶ姿。泣きべそかいている小さなあたしがいる、ほら、転んだ。早く、立ちなさいな。あたし達の時間はもうそんなに長くはなさそうだ
涼子　子供たちの姿がゆっくりと薄れていく。水彩絵の具を水で溶くように、色が滲み、そして消えていく。どうなんだろう、これは子供たちが消えたのか。それともあたしが子供たちの前から消えたのか。
涼子　思い切って土手に仰向けに寝そべってみる。なんて青い空だ。視界全てが青一色に染まる。午後の日差しがほのかに柔らかい。あぁ、このまま眠っていようか、いつまでも。それとも、ほんの微かでもいい、人の生きる証の音を探して歩こうか

間
涼子　いつのまにか、人の気配がすべて消えてしまった。視線を巡らす必要もない。あたしはこの世界に唯ひとりきりだ
間
涼子　・・・海の・・・、匂いだ。何だろう、懐かしくて仕方のない、海の匂いがする。雨が降ろうとするのだろうか、それともここは・・・、海の中なのか・・・
涼子 思い出してはいけないことが蘇ってくる。あたしがあたしについた嘘が色褪せていく。
涼子 ああ、そうだ。やっと思い出したよ。

あたしは深い海の中、ゆらゆらと漂っているんだ。あたしは記憶という殻に自分を閉じ込めた卵のような存在だ。殻の内側に映る人や風景を眺めながら、あたしは海の中を漂っているのだ。その内、殻は破れ、あたしはあたしが死んで海の底に漂っているのだという事実と向かい合わなければならない。
涼子 青い空を見上げれば、あたしの頭の上だけに空が波打ちだした。ゆらゆらとざわめくさざなみを水の中から眺めている、きらきらと光が乱反射するんだ。
もうすぐあたしが、あたし自身が終わる。さほど、もう長くはこの空を見つづけることはできないだろう。
涼子 でもそれでもいいと思う。見上げた海がこんなに透き通って綺麗なのだから。
なんて・・・、静かなんだ
あぶくの浮き上がる音。